

只見の歴史を探る⑥(最終回)

人々の祈りと 願いを込めた経塚きょうづか

只見町には、経塚と呼ばれるところがあるが二か所あります。一つは榎戸に所在する榎戸経塚、もう一つは大倉に所在した和尚屋敷経塚群です。経塚とは、経典を土の中に埋納した塚のことです。経塚を築く理由は、仏教的な作善行為の一種であると言われています。仏像を造ったり、お経を写すことも作善行為で、

いわゆる供養の一種です。

町内にある経塚は江戸時代に築かれたものと考えられます。和尚屋敷経塚群の遺物は、昭和二十八年に大倉の森登貴次郎氏(故人)によって発掘調査され、遺物は会津只見考古館に展示されています。それらは手のひらより少し小さい扁平な石に、お経の一字を墨で書いたもので、一字一石経というものです。その名のとおおり一つの文字を一つの石に書いたもので、この遺物が出土する塚を礫石経塚と言います。

このような塚は、河岸段丘や河川の縁などに築かれていました。また、只見町だけでなく伊南川の上流域にいくつもありません。いったいなぜ、このような塚が築かれるのでしょうか。

会津盆地に位置する湯川村で次のような伝承が残っています。大洪水の時、白蛇が住み付き、村人に悪さをしていたので僧侶が退治し、そこに礫石塚を築いて供養しました。その礫石塚の石を病人の患部にあてると



▲ 榎戸の経塚(横山ナカ子さん宅前)

治ると伝えられ、病気が治ったら礼返しといって二倍の礫石を奉納しました。この塚は、大洪水の犠牲者を弔ったり疫病を防止するために築かれた塚であろうと言われています。

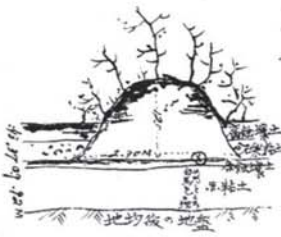
このことから只見町の礫石経塚を考えてみましょう。伊南川は、古くから「荒れ川」と呼ばれ、洪水を起こしやすい川で洪水の記録も多数あります。只見町にある経塚は、河岸段丘の縁に所在していることから、水害除けの塚だった可能性が一番高いのではないのでしょうか。疫

病防止という考えも捨てきれませんが、そのためならば、もっと大量の礫石が発見されるはずですよ。

この礫石経塚は、江戸時代になつてから広がりました。ほかにもいくつか塚があったという話は聞いていますが、現状では確認できません。塚とか壇のつく地名は、古くは塚があったと思われる場所です。ただし、一里塚という可能性もあります。塚は、各集落に一つずつはあったと考えられ、人々の祈りと願いを込めて築かれたのだと思います。

只見学

断面図



▲ 森氏が記録した和尚屋敷経塚の断面図



▲ 和尚屋敷経塚群から出土した礫石